大陸奇譚

和泉ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大陸奇譚

【Ｎコード】
Ｎ３５０５Ｚ

【作者名】
和泉ナギ

【あらすじ】
大陸を旅する３人の兄弟。
神殿に持ち込まれる「魔物」の被害を、力を合わせて解決して行く・・・のかな？
兄弟「力」を合わせて今日も旅は続く。

セイレンの唄　1

これは、広大な大陸を中心に繰り広げられる
冒険と戦いの物語である。

・・・のかな？

その昔、『女神リュミエール』がこの大陸を創り、すべての生きとし生けるものが争いもなく暮らしていた時代があった。
しかし、その平和も一人の神の『欲望』のために崩れ去った。
欲望と略奪、殺戮に狂ったその男は『魔王』と呼ばれ、『魔物』といった残虐な生き物を生みだし、大陸全土を恐怖のどん底につき落としていった。
だが、そんな狂気も終わりを告げる事となる。
『魔王』に立ち向かったのは、女神の三人の息子達だった。
三人は力を併せ、長き戦いの末、『魔王』を封じた。
自分達の指導者でもある『魔王』を封じられ、魔物たちは大陸中に散り、闇に身を潜め、ほとんどは世に害することはなくなった。
ほんの一握りの高等魔以外は・・・。

大陸で東に面した一番大きな港町、セルヴィール。
気のいい人々が暮らす、粋な港町。
この日、丘に面した町一番の教会では、朝も早くからミサが執り行われた。そして、教会は町始まって以来の人で溢れ返った。
「ねえねえ、ずいぶんお若かったわよね」
教会から出て来た若い娘が、隣の娘に声をかけた。
「ホント、すてきだったわぁ。でも、明日までしかおいでになられ

ないのでしょう？」
頬を染め、ため息混じりに言った。
普段この町は、大きい割に特別信仰の厚いものが多いわけではなかったのだが・・・、いや、人が多い方が逆に不信者が多いのかもしれない。
この日は、大陸一の神殿から来た若い坊さんを一目見ようと集まった人々で、教会設立以来の一番の大入りだったのではないだろうか？
まあ、どこの教会でも、坊さんのやることは変わらないのだが、これが若くて綺麗一（坊さんだから男なんだが・・・）だと噂を聞けば、ちょっとは覗いて見ようかなんてのはどこにでもある人の心情。
噂の真偽は？
と、聞かれれば、ミサを済ませた人々の反応を見れば一目瞭然だった。
名残惜しそうに後ろを振り返りながら家路につく人々が多く目につく。
その人達をすり抜けるように、教会へ駆けていく一人の少年がいた。
少年は教会の戸を勢いよく開け、そのまま中へ入っていった。

「もう終わってしまいましたよ。どこまで行ってたんですか？　アヴィ」
祭壇の前で後始末をしていた僧衣姿の青年が、やさしく問いかけた。
まるで光を集めたような長い黄金色の髪と、春の日差しに透ける木々の葉のような柔らかいグリーンの瞳を持つ青年を、僧衣を着て聖書を片手にしていなければ、坊さんだなんてとても思えなかった。こんな坊さんが勧誘して歩いてるんなら、若い娘さんが沢山信者に

なってくれるだろう。
「ゴメンナサイ、兄さん。オラージュ追っかけてたら遅くなっちゃった」
一所懸命走ってきた割には、どこかおっとりとした物言いの子である。
ちょっとねこっ毛の金茶の髪を掻きながら、大きな瞳をくりくりさせる。
頭を掻く両手にはめているのは、肘も隠れるくらいの手袋。しかも、手のひらの部分は動物の顔をしていて、人形劇の人形の様に口をぱくぱくさせている。ちなみに犬・・・らしい・・・？
これといって手袋をするほど寒い季節ではないのだが、本人はいたく気に入っているようなので、いいんだろうか？
「オラージュは？」
青年は、小さな弟と視線を合わすようにしゃがみ込んで聞いた。
「町で見失ったの。きっとどこかで昼寝してるよ」
町の方を指差しているのだろうが、両手にはめている手袋の犬の顔が、指の替りに町を向いている。
「・・・お腹が空けば帰ってくるでしょうけど、この町の滞在は明日まで。仕事の打ち合わせもありますから、捜しにいきますか」
ため息をつきながら、椅子に掛けてあったマントを羽織り、弟を伴い教会を出た。
アヴィは無邪気に手袋の人形で遊びながら、相も変わらずのんびりした表情でチョコチョコと後をついて行った。

セイレンの唄　2

町に出ると、いつものように賑わってはいたが、どこか普段と違っていた。どこがと聞かれても、あまり変化が見られないような気がするが、違っているとしたら港町の「市」につきものの『魚』が少ない事と、波止場に『船』がない事だろう。

大陸一の港町のはずだが、港としての活気がなかった。

小さな漁船はいくつかあるのだが、大きな船は一隻もなく、貿易船も多く入港し賑わうはずだが、一向に船が入る気配もないのである。

いたって波は穏やかで、海はまるで休日のようだ。

二人は散歩でもするかのように、のんびりと砂浜を歩きながら浜辺を見渡した。

「あ～、難破船だぁ」

見る影もないようにバラバラで砂浜に打ち上げられている大量の残骸を見つけ、アヴィは楽しそうに駆け出した。

青年はその後ろを足元に注意しながら、ゆっくりとついて行った。

「残骸で怪我をしないように」

残骸の周りを宝の山でも見るように駆け回るアヴィに声をかけておいて、自分は一番大きな残骸へと変り果てた船へ近づき、中を覗き込んだ。

中も外と同じくらい、悲惨な状況だった。

真っ二つになった船体内からは水平線が見事に望める。床も歩くことができないほど傷んで、中に置いてあったであろう調度類も誰も手をつけていないのか、見事に四散したままだ。

「すごいですね。これで生き残った人がいるんですから」

この町に着いたとき、ある程度話を聞いてはいたが、実際目の当たりにして感嘆の声を上げてしまう。ここ数日、この港界隈で船の事故が相次ぎ、死人や怪我人が続出しているのだという。

「やっぱり神様っているんだね～」
いつの間にか横に立って一緒に覗き込んでいるアヴィが感心したように言う。
手袋をはめた手を合わせて祈りのポーズをとっている。
「でも、亡くなった人もいますから『運』だと思いますけどねぇ」
神に仕えるものが、と思うような言葉をぼそっとつぶやいた。
信心深い信者や教会関係者が聞いたら、怒り肩で食って掛かるだろう。
それよりも、彼は本当に僧侶なのか？
「ふ～ん。そっかぁ」
解っているようで実は解っていないのんきな弟を笑いながら、再び町のほうへ歩き出した。
波はやさしく、そして力強く打ち寄せていた。

町はいたって賑やかである。
人々の往来も少ないほどではない。
しかし、港側は静まりかえっていた。
波は穏やかである。なのに、こんなに穏やかな日に船は一隻も出ていない。
堤防で釣糸をたれ、幾人かが小さな魚を釣っているだけだ。
そこへ町の子供達が数人、笑い声を上げて駆けてきた。どうやら犬を追ってきたようなのだが・・・。
「バカヤロウ！その辺の犬っころと一緒にするんじゃねえ！！」
・・・犬が怒鳴り声を上げながら駆け抜けて行った。
さすがに釣り人も目を剥いて驚き、子供達から逃げる犬を見た。
外見は普通の小型犬である。
大陸で最もポピュラーな種類で、庶民から貴族にまで好まれ、飼われているタイプだ。ふかふかの毛並みに大きな耳と尻尾が特徴だが、この犬はシルバーグレイの毛並みに金色の瞳が印象的だ。外見

の愛らしさと、しゃべる珍しさに、子供達は畏怖よりも好奇心を抱いて追いかけていた。
「あー、オラージュみっけぇー♪」
その様子を浜辺から見つけたアヴィが、真正面に駆けてくる犬に抱きつこうとした。
「誰のせいでこんな目にあってると思ってんだあっ？！」
犬はアヴィの抱きつきをかわし、すれちがい様に後ろ回しげりをアヴィの後頭部に決め込んだ。
アヴィは見事前のめりに転び、鞠のように数メートル先まで転がった。
犬の見事な技（？）に、追っていた子供達や釣り人が思わず拍手してしまうほど見事だった。
「見せモンじゃねえっ！」
犬は毛を逆立てて、観客を一喝した。
「ほんとに・・・」
「！」
頭上からため息混じりの声。
反射的に逃げようとしたが、首の後ろをつかまれ身体が宙に浮く。
「まったく、弟にけりを入れるなんて、『お兄さん』のすることですか、オラージュ？」
「パセっ？！」
自分を拘束した相手に、少々青ざめる。（まあ、犬が青ざめたって毛がじゃましてわかんないけど）アヴィとともにやってきた青年だ。
ちょっと待て。・・・犬が兄弟？
「僕が悪いんだよ～」
アヴィがゆっくりと起き上がり、頭や身体の砂を落としながらにこやかに言った。
邪気のない天使の笑顔とはこの事か・・・。この場合ちょっとは怒っても罰は当たらんぞ。

「もっと可愛いのにすればよかったんだよねぇ？」
「違うわい！」
論点のずれたアヴィの言葉に犬・・・、オラージュは力強く否定した。
「こんどは蛙にしてやんなさい」
その横からにこやかに口をはさむ。それがなぜかとてつもなく恐怖に感じる。
しかし、どうすれば犬が蛙に・・・？
「僕は大陸リスがいいなあ。オラージュは何がいい～？」
「わあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？！」
パセの手から、青ざめて（毛だらけで解らんて・・・）慌てふためくオラージュの身柄を受取り、ふかふかの毛に頬をすり寄せながら、間の抜けたようにアヴィは聞いた。
「ばかやろおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」
すっかり自分の意思を無視されている彼（？）は、すり寄るアヴィの顔を後ろ足で押し離しながら叫んだが、波の音に空しくもかき消された。

セイレンの唄　3

三人（二人と一匹？）は、ひとまず教会に戻り、客の来訪を待った。

この町に来た真の目的は教会での仕事ではなく、依頼主の仕事を受けるためであった。

ミサはついで。

しかし、その依頼とは？

港より戻って程なく、客は来た。

「わざわざのお越し、まことに痛み入ります」

初老の男は、従えて来た部下と数名の町の有力者とともに、自分の子供よりも若い青年に深々と頭を下げた。

「いえいえ、これが私達の仕事ですから」

向かい合って座ったパセは、にこやかに言った。

幾分か緊張がほぐれたのか、座り直した男達はひと呼吸置いて話始めた。

「もうご覧になったかとは思いますが、いろいろ手は尽くしたものの、我々の手に負えるものではございません。人づてに神殿の噂を聞きまして、もう頼れるのはパセ様、あなた様しかいらっしゃらないのです。どうか、お力添えを」

男はさらに頭を下げた。

どうやらあの浜辺の残骸についていっているらしい。

「どうか頭をお上げください。これは私達の『仕事』です。ご心配なく、『仕事』は今夜一晩で終わらせます」

若い僧侶は涼しげな顔で言ってのけた。

男達は喜びと驚きがごちゃ混ぜになった顔を向けた。町の者が長い間どうにもならなかったことを一晩で片付けるとは。

「何せ、弟達を抑えておくのが一苦労なので、一定の場所で長期労働ができないんですよ」

コロコロと笑いながら、横でジャレ合う（アヴィが一方的に絡んでいるが）犬と幼い弟を見た。
大きな町の一大事と、一人の子供のお守のどちらが大変なんだ？という顔の男達を無視してパセは話を続けた。
「おそらく、船を襲った犯人は、海に潜んでいた妖獣でしょう。遥か昔に封じられたといわれていますが、何かの拍子に目覚めたのか・・・」
「そういや、事件の起こる何日か前にでっかい地震があったな」
パセの言葉に、男の一人が思い出したように言った。顔を見合わせ頷きあう。
「地震ですか・・・」
少し考えた風だったが、すぐにもとの笑顔に戻った。
「まあ、力だけの相手のようですから、この愚弟一人で十分でしょう」
そう言って犬を指した。
「ああっ？！オレ一人にやらせようってのかあ！」
犬がしゃべった事と、犬一匹に任せようと軽く笑顔で言うパセに、男達は顎が外れんばかりに大口を開け、声もなくただ驚いていた。
「わ～い、がんばってねぇ・・・」
ガッッ！
オラージュはのんびりと拍手して他人事のように応援する『弟』を殴って黙らせた。
「い、犬、ですか？」
一人の男が、やっと言葉を発した。
不安の色を隠さず、あたり前の反応を示した。ごもっともである。
「だぁーれが犬だっっ！あんまり馬鹿にすっと、こんな町ぶっつぶ・・・うぐうっっっ！？」
パセは悪態をつくオラージュの口に、そばの果物を丸ごとぶち込んで黙らせた。
見た目と違って、意外にやることが荒っぽい。

「大丈夫です。万が一の場合、後始末は責任をもって私が・・・」
鋭い目を向ける犬に押されぎみの客に、ひと呼吸置いて言葉を付け加えた。
「でも、『万が一』があったら、女神リュミエールに笑いとばされますねぇ？」
笑顔で犬に向かって言う若い僧の言葉に、男達は一瞬背筋に冷たいものを感じた。
陰になって見えなかったが、パセの視線の先にいた犬が凍り付いたように一瞬動きを止めていたことに誰も気付かなかった。

昼間と変わらぬ波の静けさ。
天上には雲一つなく、美しい月がいつものように三つ昇り、下界を照らしている。
この世界では、『銀の月』と『蒼の月』、そして『金の月』の三つが、各々南、東、西から昇る。太古の時代より大陸では神聖なものの一つとして、太陽とともに崇められてきた。
今夜は特に一番高く昇った『金の月』が美しい。
三か月周期で月の軌道が入れ替わるのだが、『金の月』は昔から妖獣の『気』を高め、誘うと言い伝えられているためか、別名『獣王の瞳』とも呼ばれている。
かつて、『魔王』を封印した三兄弟の一人が金色の瞳をしていたため、王を封じられた妖獣達が悔しくて暴れているんだなどと、言うことを聞かない子に寝物語りに聞かせる親も少なくないらしいが、実際のところ『金の月』が一番高く昇る時、妖獣の活動が活発になるのは事実らしい。
妖獣といっても大陸各地にいろいろな『種』があるので、皆一概にそうとは言えないのだが、一番危険なのは無差別に殺し食らうもの。逆に温厚で人に混じって暮らすものもいる。しかしそれも一握

りで、ほとんどのものが太古から今だ恐れられているのである。
大きさも数十メートルからねずみ程度のものまで、小さいからといって安心できないのが妖獣の恐ろしいところである。
ある程度ならば退治も可能であるが、今回のように手に負えず、廃虚と化した街や村も少なくはない。
まして、『知能』を持ったものが相手ならば尚のこと、立ち向かえるのはかなりの力を持った戦士か術者、大陸一の神殿の僧達以外にはない。
それでもこの『金の月』の夜には、神殿の僧も大陸の腕自慢達でさえも外に出るのを避ける。報奨金に目が眩み請け負う者もいたが、それは『自殺行為』であった。
『金の月』が天上高く姿を現す時、月明りの下身をさらす者、再び現世に戻れるものなし・・・と。
そんな晩は、弱き者は息を潜め、住処に身を隠し、ひたすら夜が明けるのを待つのだ。
そして今夜は虫でさえ息を潜める『金の月』の晩。
そんな虫も恐れる晩に『彼』は浜辺に立っていた。
じっと、穏やかな波の向こうに広がる水平線を、やさしくそよぐ風と月の光りを浴びて立っていた。
まるで誰かを待つように。
身動き一つせず、ほっそりとした身体つきではあるが、水平線を見通すような意思の強さを感じさせる瞳で海を見つめていた。
その瞳は、・・・黄金色。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3505z/

大陸奇譚

2011年12月14日15時48分発行